

# 「国語Ⅰ」の効果的な学習指導のあり方について

桑 島 伸 子

## I まえがき

新学習指導要領による教育課程が、昭和五十七年度から実施されるにあたり、五十六年度夏の広島大学教育学部国語教育学会で「国語Ⅰ」のあり方を求めて」と題して、研究協議会がもたれた。その提案者であった一人として、実際に「国語Ⅰ」をどのように指導していくかをまとめてみたいと思う。もちろん、現在勤務している香川県立小豆島高等学校の生徒の実態をふまえた上で、さらに夏の協議会での提案を通して学んだこともつけ加えて、指導のあり方をできるだけ具体的に述べてみたいと思う。

## II 新学習指導要領による教育課程編成案

「国語Ⅰ」のあり方について述べる前に、本校の昭和五十七年度からの教育課程編成案を示し、国語科全体の中で「国語Ⅰ」がどのような位置にあるか述べてみたい。

1	文理	科目(一)内は単位数、※は選択科目
		国語Ⅰ(5)

	3	2
理	文Ⅲ	文Ⅰ 文Ⅱ
	現代文(3) 現・英語ⅡB、倫理・政経より二科目一セット選択	現代文(4)、古典(3)、※国語表現(3) 表現、政経、物理、食物より一科目選択
	現代文(3)	国語Ⅱ(4)、古典(3) 一科目選択
		国語Ⅱ(4)、古典(3) (古典、基礎解析より)

前表の教育課程編成案の特色として次の三点があげられる。

- ア、進路別クラス編成に依じての、コース別の科目編成になっており、特に二、三年での選択科目が同じ国語科内での選択ではなく、他教科他科目とのモザイク授業の形態をとっている。
- イ、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」が、一年生で五単位、二年生で四単位となっており、固定された形になっている。

3年	現代文	国語表現	古典
2年	国	語Ⅱ	古典
1年	国	語Ⅰ	

※ 図太枠は必修

ウ、下記編成モデル図のように、上学年選択科目型であるが、「現代文」が必修に近い形になっており、現課程の「現代国語」重視型になっている。

### III 必修科目「国語Ⅰ」の効果的な学習指導のあり方について

「国語Ⅰ」の特色として、

ア、基礎的基本的内容を身につける科目であること。

イ、現行の「現代国語」と「古典」を総合した科目であること。

ウ、「表現」「理解」の二領域、「言語事項」の一事項から構成される科目であること。

ということがあるが、この三点の上に本校の実態や、教育課程の特色を考慮すると、次のようなことが、つけ加えられると思う。

エ、中学校卒業時における国語能力の格差を是正し、基本的な事項を特にしぼって、習熟させるための科目であること。

オ、上学年の「国語Ⅱ」選択科目「現代文」「古典」「国語表現」を学習するための科目であること。

カ、「古典」の入門的指導を行うための科目であること。

本校は特に離島内の県立高校で、島内の中学生のほとんど全員が入学してくる。そのため、上下の学力差が年々大きくなっている傾向がある。その点を考慮し、選択科目を増やしたり、英語、数学では習熟度別クラス編成にするなどの方法が取られているが、国語に關しては、三年生になって、選択科目制になっているだけで、一年生ではコース分けもなく、全く平等クラスで指導されている。そのため、同じクラス内でかなりの学力差がある。このような点を熟慮

して、特に「国語Ⅰ」では、基本的、基礎的事項の徹底的な習得ということに力点を置かなければならないと思われる。以上のことに留意して、「国語Ⅰ」の効果的な学習のあり方として、特に次の三点から迫ってみたい。

(1) 「国語Ⅰ」における教材選択と単元構成について

「国語Ⅰ」の特色である古文、漢文、現代文の総合化をめざした総合単元による学習が考えられる。単元のつくり方としては、①「人生と旅」のような主題別単元、②古典を軸にして、その鑑賞文や評論文を組み合わせた単元、③古文入門、漢文入門のような目的別の単元、④古文、漢文、現代文をそれぞれジャンル別にした単元、⑤小説、詩、短歌などのジャンル別の単元、⑥時代区分による単元などが想定できる。

#### 単元モデル

##### ①「人生と旅」

三木清「人生論ノート―旅について―」

川端康成「伊豆の踊子」

萩原朔太郎「旅上」

松尾芭蕉「奥の細道―旅立ち、平泉―」

李白「送友人」

作文のために―旅について書こう―

##### ②「論語を読む」

「論語」(抄)

高橋和巳「論語―私の古典―」

㉔ 「古文入門」

「ちこのそら寝」(宇治拾遺物語)

古文と現代文

「絵仏師良秀」(宇治拾遺物語)

㉕ 「物語を誦む」

「伊勢物語」筒井筒、東下り」

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)

㉖ 「歌と自然」

「万葉集」

「古今和歌集」

「現代短歌」

㉗ 「中古の文学」

「古今和歌集」

「枕草子」

「更級日記」

右の単元モデルは前述の㉔、㉕の単元の条件をそれぞれ、具体的な教材構成によって示したものである。この中で総合単元的性格を持つものは、㉔、㉕、㉖のモデルになると思われる。㉔の単元「人生と旅」は主題による総合単元であり、大きな「人生と旅」という主題に①人生Ⅱ旅、②旅Ⅱ日常からの脱出、③旅Ⅱ出会いと別れ、というような三つの観点からせまれるのではないかと思う。古人と現代人に相通じる人生観や相反する人生観を学ばせることができ、生徒たちに教材そのものからの感動をもたらしることができるのではないかと思う。反面、このような主題別単元ばかりで「国語Ⅰ」を

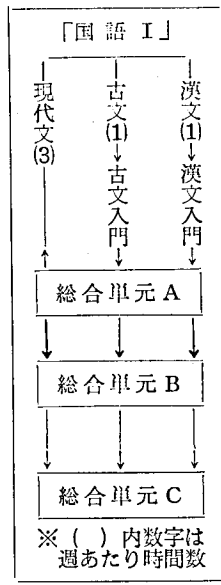
構成することは、大変難しく、現行の「古典」、「現代国語」の授業形態を継続しながら、その中に取り入れる形が妥当であると考えられる。単元モデル⑥は現在でもよく使われているものであるが、現行では、これを単元とは考えずに、一つの教材に対する補助教材との組み合わせとして実施しているものである。これは一昨年、実際に、本校採用の三省堂の「現代国語3」の教科書に従って、三年生の現代国語の授業で行ったものである。単元モデル⑥も総合単元の一形態であるが、㉔の主題別単元に、さらにジャンルという枠を加えたもので、総合単元の指導の手始めとしては、最も指導しやすい形ではないかと思う。㉔、㉕、㉖はいずれも古文の例ばかりになっ

てしまったが、㉔は入門単元で、実際に指導する古文の原文教材と、入門期の解説を組み合わせたもので、尚学図書の新しい「国語Ⅰ」教科書の単元に組み込まれているもの一つである。㉕は古文の単元にさらにジャンルという枠を加えたものである。さらに、この上に主題という枠を加えると「物語にあらわれる女性像」、「物語にあらわれる愛」とまとめることもできるが、そこまで枠を加えると、少し単元としての広さに欠けるような気もする。

このような単元モデルを考えたと、実際に本校では、どのように単元を組み合わせるかという問題について、ふれてみたい。本校においては、「国語Ⅰ」の単元構成をいきなり主題別総合単元ばかりで構成し、総合化をはかっていくことは不可能であるという意見が多く、従来の「古典」、「現代国語」の授業形態を継続しながら単元モデル⑥のような総合単元を学期に一回ぐらいの回数で入れることになりそうである。また、モデル⑥のような入門単元を、古文、

漢文については、入れることになろう。モデル⑥、⑦のような単元は、どの教材も同列に扱うのではなく、単元中の一つの教材を主とし、他の教材を補助教材、参考教材とし、主となる教材によって、古文、漢文、現代文のいずれかの時間に割りふることになるだろうと思われる。モデル⑧、⑨については、従来どおりの形で、古文、漢文、現代文のいずれかの時間に扱い、重複しない形で、平易な順に配列されることになろうと思う。(図式1参照)

〔図式 1〕



このような「国語 I」の単元構成を、実際の年間指導計画をたてて考えてみると、次のようになる。(図式2参照)

これは、本校で採択した「国語 I」教科書の単元構成にほぼ従いながら、仮に作成したものである。横軸が「表現」、「理解」の各領域、たて軸が学期等の時間的なものである。前述の単元モデル⑧の主題別総合単元を、六月のところに入れてみた。このような単元構成で授業を行う場合の留意点として、次のようなことがあげられる。

ア、総合単元 A、B、C (図式1参照) に組み入れる教材が、それぞれ、現代文、古文、漢文の授業のたての流れの中で、難易、順

〔図 式 2〕

学期	月	単元	表現			理解		
			話し方	聞き方	作文	現代文	古文	漢文
1	4	小説 (→)				幸福 屋根の上のサワン		
		古文への誘い					古文入門 そのそ ちら寝	
	5	漢文を読む						漢文入門 望春 矛盾
		詩				素直な疑問符 富士山		
7	人生と旅			旅について 書こう	伊豆の踊子 人生論ノート 旅上	奥の細道	送友人	
	随筆			感想文の 書き方	無常のリズム 伊勢の的矢の日和山			
2		物語を読む					もと光る竹 壇の浦	

序、ジャンルの面で逆行したり、重複したりすることのないようにする。

イ、本校では、「国語Ⅰ」の授業を現代文と古文・漢文に分けて、

二人の教師で担当することになるが、その場合、総合単元A、B、Cにおいては、一人の教師が指導するか、二人の教師で指導するのであれば、連絡を密にする必要がある。

ウ、古文、漢文においては、総合単元A、B、Cにおいても継続して、文法、語法指導を行うようにする。

エ、総合単元A、B、Cのまとめとして、作文指導を行うばかりでなく、現代文教材を中心に継続的に作文指導を行い、古文、漢文においても、適宜、作文を書かせる時間を設け、また、作文そのものを目的とした「文章表現」単元を構成することも必要である。

オ、総合単元A、B、Cの古文、漢文教材は主題を重視しながら、できるだけ平易なものから選択する必要がある。

カ、総合単元A、B、Cに組み込む現代文教材のジャンル、時代、作家等は、できるだけ多岐にわたる、片寄らないようにする。

キ、評価については、総合単元A、B、C、その他の単元にわたって総合的に行うことが必要である。しかし、定期考査については、時間等の問題があり、「国語Ⅰ」a（現代文）、「国語Ⅰ」b（古文・漢文）に分けて行うことになろう。その場合、総合的な問題については、適宜、「国語Ⅰ」a、「国語Ⅰ」bのいずれかで出題して、評価することになろう。

(2) 「国語Ⅰ」における古文、漢文の入門期指導について

前述の「国語Ⅰ」の特色の力として、「古典」の入門的指導を行

う科目であることを位置づけた。現行教科書では、古文、漢文のそれぞれについて、入門単元が設けられているので、それに従って入門指導を行っている。古文では「ちこのそら寝」（宇治拾遺物語、口語訳つき）、「亀山殿の水車」（徒然草）、「安養の尼の小袖」（十訓抄）の三教材、漢文では「1送りがなと返り点」、「2漢文の基本的な構造」、「3訓読上注意すべき文字」の三つの説明が、「春望」他、格言等の例文を用いて、一つの単元を構成している。しかし、実際問題としては、入門単元を終えたのちでも、かなりな期間、入門の内容を指導しているわけである。また、現在、口語訳つきの教材は古文の最初の一教材、漢文の書き下し文つきの教材も一教材のみであるが、もう少し、口語訳、傍訳、書き下し文つきの教材を使用する期間を延長し、量も増やした方が望ましいと思われる。また、入門期の古典指導にありがちな、文法、語釈中心主義の授業に陥らないようにするために、「古典と人生」、「古典と私」等の単元を設けて、古典に向かう姿勢について書かれた文章を学習させることも、より深い内容の理解をうながすことになろうし、また、古典の意義について考えさせることにもなる。

また、「国語Ⅰ」での古文、漢文は、「国語Ⅱ」、「古典」に向かうための基礎づくりとしての役割を持つものである。特に本校では、幅広い学力差を考慮して、英語、数学では、コース別や、習熟度別のクラス編成がとられているが、国語では三年生になって、選択科目制になっているだけである。このため、高校入学時では、かなりの学力差のある生徒が同一クラスにおり、そのクラスで、「国語Ⅰ」の授業を行うことになり、特に、高校に入って初めて本格的

に学習する古文、漢文は、最初の時点で取り残されて、三年間何もわからないままで終わってしまうというケースも少なくない。そのために、従来の入門的内容をもっと長期間にわたって学習させ、とにかく、古典のもつ雰囲気慣れさせ、「食わず嫌い」にならないことを第一義に考えなければならぬ状態にある。また、基本的内容の精選と徹底も大きな問題である。本校の生徒の実態を考えてみると、次のようなことからを中心に、習熟させることが望ましいと思われる。

(イ) 基本的な文法事項（語の識別、用言の活用、係り結び等）を理解すること。

(ロ) 口語訳、傍訳の利用のし方を学ぶこと。

(ハ) 原文に慣れること。

(ニ) 辞書のひき方に慣れること。

(ホ) 平易な名文を暗誦すること。

(ヘ) 音読や朗読が正確にできること。

(ロ) 古典に向かう姿勢について考えること。

(ハ) 古典にあらわれた人間や社会について考えること。

また、現行の古典工乙を学習している一年生の古典を学習するうえで、の弱点やつまづきを把握して、指導に生かす工夫も必要である。特に、本校一年生の弱点として、

〔古文〕

(イ) 語と語の切れ目がはっきりわからない。

(ロ) 音読がたどたどしい。

(ハ) 用言の終止形がわからず辞書が引けない。

(イ) 口語訳する場合に、ことばをどのようにつないでいけばよいかわからない。（特に助詞や形式名詞の訳し方、つなぎ方）

〔漢文〕

(イ) 漢文の返り点の使い方がはっきりわからないため語順が理解できない。

(ロ) 書き下し文に直す手順が不明なため速度が遅い。

(ハ) 漢字そのものの持つ意味や読みがわからない。

(ニ) 漢和辞典が使えない。

ということがあげられると思う。このような弱点を克服させるために、前述の基本的内容の徹底はもちろんのこと、範読のし方を工夫したり、授業中に辞書を使う機会を設けたり、口語訳や解説の利用の工夫をしたりすることが必要であろう。また、書き写したり、書き下し文に直したりするなど、作業を取り入れた練習の工夫も必要である。とかく、文法中心、語法中心に進み、急ぎすぎない入門期の古典指導をより生き生きしたものにし、生徒の価値意識や問題意識を引き出すような方向づけをしていくことが望まれる。

(3) 「国語工」における効果的な作文指導について

「国語工」における作文指導においては、選択科目「国語表現」の導入段階として、基礎的な作文力をつける必要があるが、小、中学校での生活綴り方的な作文に加えて、意見文、感想文、随筆などさまざまなジャンルの作文に慣れさせる必要がある。

特に、作文指導の柱として、

(イ) 実際に書かせて学習させる面

(4)書き方、推敲のし方などを理論的に学習させる面

(ウ)すぐれた文章を鑑賞させて学習させる面

の三つのがらが考えられる。しかし、従来の作文指導では、(7)は融合されていたが、(ウ)の点は、単に読解、鑑賞のみに終始し、文章を書く技術にまで結びつかない場合が多くあった。そこで、(ウ)の面から、妥当と思われる教材を、「文章表現」単元に織り込み、主題中心、心理追求中心の読み方ではなく、優れた表現を指摘するなどの、実際の表現に直接結びついた指導のし方を考える必要がある。「文章表現」単元のモデルとしては、(7)(ウ)の三つの柱を含んだ教材を配置した、次のようなものが考えられる。

### 単元モデル

⑧「紀行文を書く」

福永武彦「貝合わせ」

岡本太郎「秋田」

紀行文を書く

推敲のし方

⑨「読書と私」

井上ひさし「忘れられない本」

生徒作品「あゝ野麦峠」を讀んで」

読書体験を書く

また、(ウ)の面については、主題別総合単元の中でのまとめの作文(前述の単元モデル「人生と旅」では「旅について書く」という

教材になる)を書かせてみることも、「表現」と「理解」の各領域の関連という点から、有効な方法であると考えられる。

また、このような単元構成の中で、さまざまなジャンルの文章を書かせる場合に、主題設定、取材、構想、叙述、推敲、評価という作文作成のプロセスを学習させ、それぞれの段階での指導や、評価を適切にしなければならぬと思う。このような基本的な作成の過程を身につけさせることが、上学年での選択科目「国語表現」に対して有効であると考えられる。そのような基本的な過程を、例えば、課題文を設定して、それをもとに要約、批評、意見等を書かせる指導、単元のまとめや、感想を書かせる指導など、変化のある、さまざまな角度の指導の中で、身につけさせていくことが望ましい。

さらに、本校では、このような「国語I」での作文指導をふまえて、選択科目「国語表現」では、より適確なことを使って表現できるように、語彙、語句指導に力点を置くように考えている。また、新しい指導方法として、グループでの課題レポートを通じて、相互批評を取り入れたり、模範文による指導なども考えられると思う。

また、作文指導と読書指導の有機的な結びつきをねらって、読書メモや読書カードを作成させることも一案であろう。年月日、題名、作者、気づき程度の簡単なものであっても、一年間に、一定量をこなすことは、作文力のもとより、読書生活設計の一つの方法でもあるし、漫然と読んだり、書いたりしている生徒の現状を少しでも打開できるのではないかと。

## IV あとがき

以上、「国語Ⅰ」の效果的指導のあり方を求めて、おもに、單元、古典の入門指導、作文指導をとりあげて述べた。特に「国語Ⅰ」では、総合化を急ぐあまりに、現代文、漢文、古文、表現の、それぞれの学習の体系性や、継続性が失われるのではないかという危惧も感じられる。その問題を打開していく上でも、「表現」、「理解」領域の效果的な関連学習、それぞれのジャンルの多角的なくみあわせが必要となる。そのためには、現代文、古文、漢文はもとより、作文指導、読書指導、言語事項も織り込んだ、有機的な年間指導計画の立案が必要となる。

また、「国語Ⅰ」を一人の授業者で担当するにせよ、二人で担当するにせよ、十分な情報交換や、意思疎通が必要になると思う。特に「国語Ⅰ」では、基礎学力の養成ということを念頭においての、教師間の共通理解が必要であろう。

また、今回は、「国語Ⅰ」における言語事項の指導や、表現領域の具体的な指導についてはふれられなかったが、昭和五十七年度からの新課程による指導を通して、模索していきたいと思う。

(香川県立小豆島高等学校教諭)